

## 質疑応答

岡 どうもありがとうございます。お話をうかがっていて、私はシンガポールという国のことを何も知らなかったのだということをつくづく思い知りました。京大の学生でブルネイに学部留学した人がいるのですが、彼女はアラビア語も勉強していて、イスラームについて学びたいというのがその理由でした。留学も、イスラームの人々が生きている国に留学したかったのだそうですが、京大の交換留学の提携校は、中東では、テルアビブ大（イスラエル）とイスタンブール大（トルコ）しかなくて、でもトルコはアラビア語ではないので、彼女はブルネイを選びました。卒論は、ブルネイのマイノリティがテーマでした。ブルネイは、シンガポールとは逆ですよ。ムスリムがマジョリティで、華人がマイノリティ。彼女は特に華人の無国籍者をテーマにしている、私はそのとき初めてブルネイの地図を見て、初めて、ブルネイという国がどこに位置しているのか、ということを知りました。

038

先ほどの野中さんの発表のときのインドネシアの地図にもブルネイがありましたよね。そのすぐそばにマレーシアがあって、マレー人などのムスリムがマジョリティを占めているその地域に、中東のイスラエルのようなどいうか、シンガポールがあるんですね。シンガポールがマレーシアから2年後に追放されたのはどうしてなのですか。

藤井 統合に向けての協議をずっとしていて、いったん統合されたのですが、あくまでマレー人（ブミプトラ）がマジョリティであることを前提とした政策を進めたいマレーシアと、シンガポールの華人の人口比は当時7～8割です。それではうまく立ちゆかないとするリー・クアンユーの立場は最終的に折り合いが付かないので、「だったら出ていけ」というふうにマレーシアから通告されたというのが大ざっぱな状況のようです。

岡 やはりワタン /Homeland の話ですよ。シンガポールというワタン、あるいはそれは、マレー人にとってワタンたり得るのか、ワタンとは何か……。

冒頭、ご紹介のあったタシュ・アウの小説 *We, the Survivors* で、英語という言葉語りをする者が、英語では自ら語れない者の物語を語ることによって他者の物語を収奪し、それを一つの資源にして自分は名声を獲得するというお話がありました。それをうかがいながら、ナワール・エル＝サアダーウィーの『零度の女』というアラビア語の小説のことを思い出しました。サアダーウィーは、昨年3月、89歳で亡くなった、エジプトのフェミニスト作家です。『零度の女』は彼女の代表作ですが、まさにそのこと、「語り得る知識人」が「語る術を持たない者（サバルタン）」を資源として収奪すること、それが主題のひとつとなっています。死刑囚の女性の経験を、精神分析の専門家である女医が聞き取ろうとする動機自体が、それをもってさらなる自分の業績にしようとするもので、死刑囚からは最初、会うこと自体を拒絶されるのですが、紆余曲折があって、彼女は死刑囚の独房に招かれます。作品自体の大半は、死刑囚自身の一人称の語りで構成されています。作品の結構自体に、この、「語りうる者」と「語りえない者、ゆえに他者によって語られるしかない者」の隔たり、そしてそこに孕まれる搾取の問題が、きわめて自覚的に描かれた作品です。

039

アラブの女性の作品を読んでいると、書き得る女（エクリチュールを持った女）が、語ることのできない女の物語を表象することによって収奪するということに対する批判を女性作家自身が作品に書き込んでいるものが割とあるのです。しかし、日本の女性の小説にはそういう問題意識を私は見たことがありません。書き言葉と話し言葉が乖離しているアラビア語の世界だからなのか……。日本の場合だと、女性作家自身が高等教育を受けていなくても、文学作品を書いていたりにしていますよね。

それと、最後の幽霊のところで思い出したのは、ガーダ・アル＝サンマーンというシリア出身の女性作家の『四角い月』という短編集のことです。「四角い月」というタイトルの作品はないのですが、ここに収録されているのは全て、幽霊譚ばかりです。巻頭に置かれた作品（「金属製の鰐」）は、パリに暮らすレバノン移民の話なのですが、そこに、移民を幽霊になぞらえたくだりが出てきます。要するに、そこにいるのだけれどもフランス人には自分たちの姿は見えない存在だから。それに関連して、イギリスのケン・ローチ監督の映画「ブレット

&ローズ」という作品でも、これは、メキシコから合衆国に密入国してロサンゼルスで働く労働者の若い娘の話なのですが、彼女がオフィスビルで床掃除をしていると、オフィスの社員たちが、彼女の頭の上をまたいで通っていく場面があります。そこでも、「私たちの姿は彼らの目には見えない」というような台詞があったことを思い出しました。

もちろんシンガポールのマレー人の場合は、移民とは逆に、自分が生まれた地にいながらにして他者化されているということで、これは、イスラエルのパレスチナ人の経験と重なりますね。自分たちのワタンにいないのに、そこは自分たちのワタンではない、そういう存在にされてしまっている。移民とは違うけれども、でも、移民と同じように、自分が生を織りなしているはずのその土地に、しかし帰属していないということが、人を幽霊のような存在にしている、ということが共通していると思いました。

藤井

ありがとうございます。言語が違うというのは収奪も非常にはっきり認めやすいというのはあるのだらうと思いました。僕自身、気が付いた例を挙げると、マリック・サジャドの*Munnu: A Boy From Kashmir*というグラフィックノベルがあります。カシミールのムスリム圏で生まれ育った少年の自伝的小説です。これはグラフィックノベルなのですが、カシミールの人々が地域の象徴的な動物である鹿として描かれています。支配するインド兵たちが人間の姿で出てきて、鹿を狩るようなシーンもたくさん出てくるのです。サジャド自身はカシミール人として書いているのですが、英語で書かれている物語で、自分は純粹にカシミール人の経験を表象できているわけではないというあたりもこの本の中にも書かれています。特に最後の方ではEUの使節のような人が来て話すのですが物別れに終わったり、英語圏における受容のされ方の身勝手さのようなものが強調されたりもしているのですが、サジャド自身はイギリスの「ガーディアン」や「ニューヨーク・タイムズ」などにも割と寄稿を求められて、現地の正しい報告者という扱いを受けるという、ねじれた構図はずっと続いていると思いました。

それから幽霊譚で思い出したのですが、東南アジアの英語文学を読

んでいると幽霊の話がすごく多いのです。フィリピン人作家の短編に日本軍に殺された女性の幽霊が出てきたり、ベトナム系の作家がポートピーブルを描くときにも船が転覆するときに幽霊が現れて助かったという話をおばあさんがしていたりして、東南アジアの歴史を英語で書くということが幽霊譚を誘発しやすいのではないかという気はするのです。完全な形として英語の中で描くことができないけれども、必ずそこにいる何かすくい取り切れなかった記憶が漂っているような感覚が英語作家に共通してあるのだろうという、まだまだ取っ掛かりにすぎないのですが、そんな気がします。

岡 東南アジアに幽霊の話が多いというお話をうかがって思い出したのですが、「881 歌え！パパイヤ」という、2007年のシンガポールナンバーワンの超大ヒット映画があります。華人の姉妹が「パパイヤシスターズ」というコンビで歌手として売り出して、その悪役としてドリアンシスターズが出てきます。8月のお盆の頃の話で、華人文化なので、日本と同じ仏教で、お盆で死者たちの霊の供養にみんなで歌合戦をして、ものすごく盛り上がっていました。日本のお盆も、帰って来た死者たちを生きている者がもてなしたりして、西洋の幽霊とは違いますね。でも、マレー系だからムスリムですよ。お盆にこの世に里帰りする仏教の幽霊とは違いますね。でも、「歌え！パパイヤ」は面白いのでぜひご覧ください。

041

野中 どうもありがとうございました。大変面白かったです。岡さんもおっしゃっていましたが、やはりシンガポールは、ムスリム・マジョリティのマレー世界の中で、ぽつんと存在する特殊な立ち位置がとても重要なのだと思います。だからこそシンガポールの国家によるイスラームとマレー人の管理と同化政策が徹底されていったと思うのです。

歴史的にも、もちろん1963年から1965年のたった2年間だけマレーシア連邦の一部でしたし、それ以前から、そもそもイギリス領としてマレーシアとは一体でした。19世紀には、マラッカとペナンとシンガポールが海峡植民地としてほかの地域に先んじてイギリス領に取り込まれていったという歴史もあります。前近代には、マラッカ王国やジョホール王国だった地域です。本来は国境線が引かれてこな

かったのに、1965年にリー・クアンユーたちが出ていったために分裂したのです。そういう歴史を考慮して、シンガポール政府のマレー人に対する管理と包摂といった政策も見ていくべきなのだろうと思いました。

本作は、英語で書かれていることによってマレー人の良いイメージがマジョリティの華人に伝わったのかもしれませんが、皮肉かもしれませんが、アルフィアン・サアットがやろうとしていることは実はシンガポールの主流派にはまあまあ受け入れられるレベルの話だったのかもしれませんが。英語で書いたからこそ、この作品はとても評価されたとも論じられています。マレー語で書かれていたら、ここまで評価されていなかったかもしれない。もしかするとアルフィアンは、シンガポールの「マレー人」の一人として、シンガポールの主流派から見れば、うまく包摂された人物だとみられているのかもしれませんが。

作品は、全部面白かったのですが、中でも「ふれあわない手」がとても面白かったです。ヒジャブをかぶっている女性が男性と握手をしない描写は、私が先ほど紹介したフェビー・インディラニの作品の中でも見られます。ヒジャブをかぶるようになった女性が男性との握手を避ける傾向が生じたのは、インドネシアでは、ここ30年ほどのことだと思います。マレーシアでも似たような状況でしょう。歴史的には、女性たちは普通に男性とも握手をしていましたが、1980年代以降、イスラームの教えに多くのムスリムが自覚的になる中、イスラーム的には男女は直接触れ合わない方がいいのだという言説が多くの人に受け入れられ、実践されるようになったのです。インドネシアでは、男性から握手を求められても、「ごめんなさい。私は握手を求められてもしません」というポーズをとる女性が多くなっていました。ヒジャブを被る女性たちが出始めた当初は、こうした実践が過激派に傾倒しているからだとか言われて、批判されたりもしました。ヒジャブをかぶるようになった女性たちは、「これは全く政治的な話ではなくて、イスラームへの信仰心からやっているのです」と強く訴えました。インドネシアの短編小説の中でも、これはしばしばテーマとして描かれています。アルフィアンも、こういう時代状況を描いたのではないかと思います。だからこの作品でも、「握手しないことによってマレー人全員が過激派扱いされてしまうのだ」とお父さん

が言ったり、「全員に恥をかかせた」とお母さんが言ったりするので。世代間ギャップは、とても重要なファクターです。ヒジャーブやトゥドゥンをほかの世代に先駆けてかぶり始めたのは、シンガポールでも、マレーシアでも、インドネシアでも若い高学歴の女性たちでしたので。

それから、幽霊譚のお話も多分、マレー世界にそもそもあるアニミズム的な信仰、つまり日常世界のいろいろなところに神が宿っているという考え方とつながっていると思いました。マレー語やインドネシア語で「ジン」と呼ぶのですが、アッラーとは違うレベルで妖怪のような魔物の存在が信じられています。それを鎮めるために、インドネシアではアニミズムとイスラームが入り交じったパワーが信じられ、そうしたパワーを持つ人物が民衆から頼られたりしています。恐らくシンガポールやマレーシアでも同じようにアニミズム的な信仰の中で、幽霊が身近な存在なのではないかと思いました。

藤井     どうもありがとうございます。やはりシンガポールでは大体こういう意味合いになるらしいということは、僕も勉強しながら訳しているうちに分かったのですが、それが前後のマレーシアやインドネシアを含めたマレー人世界においてどんな要素を持つ作品や作家になるのかというところまでは全然分からないので、文脈を聞かせていただいてもありがたかったです。

それから、マレーに広く伝わる民話らしいということで、ハントウ＝テテクやポンティアナックの話など、僕には分からなかったのですが割と有名な妖怪や亡霊の話が出てきて、それがうまくシンガポールの現状とかみ合うようにアレンジされているのが読みどころなのではないかとは思いました。中には成仏できなくて戻ってきた女性の幽霊に、これから医者になるであろう研修生が聞き取りをして、これを小説の題材にしようと目論んでいるような掌編もあります。アルフィアン・サアットは元々医学部の出身だったので、やはり幽霊譚を聞きながら、これは使えると思っている、その「使える」というのはどうしても読者や社会にうまく包摂されるというような意味合いを持ってくると思うのですが、作者がそういう自分の姿も折々に見つめようとしているのではないかというのも連想しました。ありがとうご

ざいました。

岡 野中さんに伺いたいのですが、妖怪や幽霊、おばけの類いは、東南アジアで、エスニック・コミュニティを超えて共有されているのですか。

野中 共有されていると思います。民族の壁を超えるだけでなく、宗教の壁も超えて、クリスチャンも同じように、インドネシア語では「ハントゥ」と呼ばれるおばけや妖怪のようなものを信じています。それを鎮めるのは、一般的にはシャーマンというのでしょうか、マレー語ではドゥクンと言います。このドゥクンは、しばしばイスラーム的な力を持っている人でもあるのですが、そういう人がやって来て、おばけや妖怪を鎮めるようなおまじないを言ったり、妖怪が憑依してしまい、気絶したり奇妙な行動をとったりする人に触るなどして治療を施し、妖怪を出してやったり。そういうことは各地で今でも見られます。ですから、民族や宗教を超えて共有された信仰であり、実践であり、現象だといえます。

044

岡 面白いですね。それで思い出しました。イラクのユダヤ人について研究しておられる天野優さんからご紹介いただいたのですが、イラク出身のユダヤ系アラブ人作家のサミール・ナッカーシュに「タンタル」というアラビア語の中編小説があります。タンタルとは妖怪で、イラクでは、ムスリムもユダヤ教徒もこのタンタルを信じているという話です。宗派の違いを超えて、同じ妖怪の存在を信じているということが、人間と人間が住まう土地、ワタン/Homelandの問題と関わってくる何かがあるような気がします。

久野 本当に素晴らしい短編ばかりだと思いました。今のお二人の幽霊の話でも思ったのですが、植民地経験がある場所において幽霊や亡霊のようなものが出てくる、抑圧されていたものが復活するというような、ものすごく類型化してしまうと、ゴシック文学のような、抑圧されていたもののよみがえりのようなものがあると思います。そういうものが少し関係しているのではないかと想像したのですが、そういうもの

ととらえて良いのでしょうか。

それから、シンガポールのマレー人作家のアルフィアン・サアットという人は、主に華人との関係の中でのマレー人を描いている作品という側面があったと思うのですが、インド系の人が主題化されるというか、その関係が主題化されるような作品もこの中にはあったのでしょうか。

それから、発表媒体としてシンガポールの英語文芸誌のようなものはあるのでしょうか。あるいは、英語ですからそれこそ国境を越えた形で最初からイギリスなり何なりの大きな文芸誌のようなところが入り口になるのか、それとも先ほどのインドネシアの作家のように、インターネットを通じたフォーマットを利用した形での発表になるのか。作家になっていくステージ、どういうステップでこのようなすごい作家が出てくるのかについて関心を持ちました。

藤井     どうもありがとうございます。発表媒体からお話ししますと、やはりマレー語の雑誌や中国語の雑誌は、1930年代から1940年代にかけてそれぞれの言語の団体が代表的な雑誌を立ち上げる動きがあったということが、文献を見ると書かれています。それぞれの言語に代表的な文芸誌があったということのようです。ただ、今でもそれが活発に活動しているという情報はなくて、むしろ文芸誌に投稿してコミュニティに共有されるという流れがなくなってきているのではないかと感じています。そのあたりは情報がなくて僕のほうがいまひとつ分かってはいません。

今回のアルフィアン・サアットの短編集の場合、シンガポール内にある Ethos Books が2012年にまず出しています。それは国内流通のみだったようです。その後、2018年に同じ内容で出版されました。ただし、オリジナルはイラスト付きだったらしいのですが、イラストなしのテキストのみの版がニューヨークで出されています。ニューヨークで出版したのは、シンガポールアンバウンドという団体が主催している出版社で、シンガポールの声をアメリカ側などにも流通させようという出版社だったようです。シンガポールでは何かと抑圧されて作家が発表の場をうまく見つけられないとしても、シンガポールアンバウンドというニューヨーク拠点の出版社であれば発表できます。



そういうことも狙いとしてはあって、その出版社の第1弾が *Malay Sketches* でした。第1弾でちょっとバタバタしたのか、落丁本になっていて、後ろの方が2、3ページ欠けています。出だしにありがちなことだなと思いました。

あとはインド系との関係ですが、驚くほど少なくて、そのみから判断するなら、やはりマレー人の立場は華人との関係が中心になるのだろうと思わざるを得ません。刑務所で働く看守が主人公の話の中で、マレー人の主人公が死刑執行人の座を譲ると言われるのですが、譲ると言っているのはどうやらシンさんというインド系の人らしいという話がありました。それ以上踏み込むような、インド系との関わりの全てが見えるような物語は僕には見つけれませんでした。

幽霊に関しては、抑圧された者の回帰というのは恐らくそのとおりだとは思いますが。フィリピンの英語文学を訳す機会があって、植民地支配の中でなかったことになっているもろもろの暴力の記憶のようなものが掘り起こされかけるのですが、それで語っていいのかという問題とセットで追求されるような小説で、亡霊自体を描くことはないのですが、ベトナム戦争を描く映画のロケをフィリピンでして、そこに映っている橋が実は第二次大戦中に日本軍が爆破した橋であるという、透かし絵のように別の時系列、時間軸の記憶のようなものがなぜか目の前にあるという描写があったりするのです。ただそれは、その事実を知らなければただの川に架かっている古い橋でしかありません。そういう意味でも、それぞれに同じように抑圧されたものがあって、ふとしたところで表現に出てくるといふ流れではないかと思います。

久野     ありがとうございました。

岡        藤井さん、どうもありがとうございました。